

〈主日礼拝説教〉2012年 7月 1日

初代の教会—④ 心を合わせて祈ることが一番

サムエル記下 15章 30～32節, 使徒言行録 1章 12～14節

武田真治

1、嘆きのオリーブ山

かつてダビデ王の子供アブサロムが謀反を起こし、エルサレムに攻め込んでくるという知らせを聞いたダビデ王は、息子と戦うことを避けて側近たちを連れてエルサレムから逃げ出します。その逃亡の様子を記した箇所が今日の旧約聖書の言葉です。

即ち『ダビデは頭を覆い、はだしでオリーブ山の坂道を泣きながら上って行った。同行した兵士たちも皆、それぞれ頭を覆い泣きながら上って行った。』です。ここでダビデは泣きながら「はだしで」坂道を上っています。それは奴隷や犯罪者が連行されて行く姿を表していると言われていています。つまり、都エルサレムから追い出される自分をダビデはもはや王様ではなく一人の奴隷・僕に過ぎないと見做していたと。

以来、このダビデが越えたオリーブ山のことを「嘆きのオリーブ山」と呼ぶようになったのでした。

新約聖書になり、同じようにこの「オリーブ山」で嘆き、苦しまれた方が、ダビデの子（＝子孫）であるイエス様でした。

即ち『イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。そして、ひざまずいてこう祈られた。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」イエスは苦しみもたえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。』（ルカ福音書 22章）です。まさに「ゲッセマネの祈り」です。ゲッセマネとは、オリーブ油を絞る場所という意味であり、オリーブ山の坂道の中腹にある平坦な場所でした。イエス様もここで血の汗を流す程に、苦闘しながら祈られたのでした。

2、イエス様の昇天の場所

イエス様が昇天された時、どの場所から天へと昇られたのかという点についてはあまり考えられないことかもしれません。実はその場所が「オリーブ山」なのです。

そのことは、弟子たちがイエス様を天へ送った後でエルサレムへ戻って行くのですが、その時『使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た』（12節）と記

されているからです。

イエス様は、ご自分が天に昇られる時にその場所としては、エルサレムの弟子たちが集まっている場所でも良かったでしょうし、例えば野外である必要があると言うのであれば、十字架につかれた「ゴルゴダの丘」でも良かったでしょうし、復活なされた「お墓」から天に上って行かれた方がより象徴的ではないでしょうか。

しかしイエス様はわざわざ「オリーブ山」まで弟子たちと一緒に行かれ、そこから弟子たちの前で天へと向かわれたのでした。そこにはイエス様の「オリーブ山」への特別な思い入れが込められていると考えることが出来るのではないかと思います。

おそらく今までの旧約聖書のダビデに代表されていた「嘆きのオリーブ山」そして何より自らも血の汗を流されたその場所を、もはや嘆きではなく「喜びのオリーブ山」であることへと変えようとされたのではないか、つまり、イエス様の復活と昇天によって、もはや「嘆き」は終わり、天へ向かう道が開かれたという「希望」が示されたことを表すために、わざわざ「オリーブ山」をお選びになったのではないかと思えるのです。もはや、あのゲッセマネの祈りは克服され、終わりを迎えた。それこそ天へと昇華されたのだと。

イエス様が「オリーブ山」で祈り求められた神様の「御心」とは、まさに「復活と昇天」であり、ここにその御計画は完成したことを弟子たちに教えようとされたのではないかと思います。

いかがでしょうか？

特にこのことは私自身にとって喜びを与えてくれます。ゲッセマネのあのとても厳しいイエス様の祈りがこうして正しい答えを与えられ、その苦しみが素晴らしい形で報われたことを、ご自身の体験を通して示して下さったように思えるからです。

それは、私たちの悩みや苦しきも、必ず神様の「御心によって」導かれていることであることを、そしてすべては「天へと」向かっていることを示してくださっているからです。そう信じて良いと。

私たちにも各々の「オリーブ山・ゲッセマネの夜」を経験する時があります。これからどうなるのか、できればこの杯を飲みたくない、もう逃げ出してしまいたいと考えてしまう程の辛い時が、しかしそのような時にも「御心のままに」と祈ることが出来る根拠を与えて下さったのがこのイエス様の「昇天」の出来事です。

それは、イエスが今も「天に」いて下さって私たちを守り導いて下さり、そのために力と

勇気を「天から」与えて下さっていることを信じられる根拠です。それ故に、その天の御守りと御導きに委ねて、前を向いて生きていけるのです。

3、そこに集まっていた者たち

そして、以上のように、イエス様を天にお送りした弟子たちは『都（＝エルサレム）に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。』のでした。そこで『彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。』のでした。

その時、そこには十二弟子の他にも、女性たちもいたこと、そして何より「イエスの母マリア、またイエスの兄弟たち」も一緒にいたとあります。しかもただそこにいただけでなく「心を合わせて熱心に祈っていた」と。つまり彼らがイエス様を信じる者たちとなっていたことが分かります。すごいことですね。

彼らは、かつてイエス様のことを理解できずに、イエス様を無理やり故郷へと連れ戻そうとした家族たちでした。

その時のことは以下のようなものでした。弟子たちが『母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます』とイエス様にお伝えした時、イエス様は『わたしの母、わたしの兄弟とはだれか。』と言われ、み言葉を聞こうと集まっていた人々を見回され『ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそわたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。』（マルコ福音書 3 章）と教えられたのでした。その言葉は弟子たちへの励ましであると共に、イエス様の母マリアや兄弟たちへの教えの言葉でもあったのでした。血縁を超えて、神様の御心を行うことで結びついて欲しいと。

あの時、「外」にいて中に入ろうとしなかった母マリアや兄弟姉妹たちが、今や弟子たちの「内」にいて一緒に祈りを献げているのです。なんと素晴らしいことではないでしょうか。おそらくイエス様の十字架と復活とを目の当りにした彼らは、悔い改めてイエス様の弟子として生き直すことを決意したのでしょう。

私たちは家族への伝道に対してとても苦勞をしています。このイエス様の家族たちの回心は、いつか私たちの家族も変えられる時が来ることへの希望を与えてくれます。諦めないで祈り続けていきたい！

4、心を合わせて熱心に

ここで『心を合わせて熱心に祈っていた』弟子たちが、この後 2 章に於いて聖霊を与えられて、世界で最初の「教会」になっていくのです。やはり、教会の原点は何より「心を合わ

せて熱心に祈る」ことであることを改めて教えられます。どんなにたくさん的人数がいようとも、どんなに立派な会堂があろうとも、心を合わせて祈り合う群れでなければ「教会」とは言い得ないのです。また、そうでなければ聖霊も与えられないのではないのでしょうか？

ここで「熱心に」と訳されている言葉は「くっついて揺るがない＝固執して離れない」という意味を持つ言葉です。それ故、日本語の「熱心」という言葉が持つイメージから、熱狂的に祈るとか一心不乱になって祈るという意味に採ってはいけません。むしろ、諦めないでずっと祈り続けて行くということを表しています。一つのことに心を合わせて「諦めないで祈り続けていく者たち」の集まりこそ「教会」なのです。

その際、彼らが一つになって求めていた祈りとは「聖霊を与えたまえ」という祈りであったことは言うまでもありません。イエス様の『あなたがたの上に聖霊が降るとあなたがたは力を受ける』という約束の言葉を信じて祈り求めていたのです。

私たちの祈りもこの求めに尽きると言い得るように思います。神様が与えられる「聖霊」という「上からの力」を、何より私たちも必要としているのではないのでしょうか？それなくしては生きていけない存在であることを知っている者こそが、イエス様の弟子である根拠なのです。 (説教より抜粋)